

現代表記の論理と美学

工藤力男

前向上

これは本来「国語学概論」の時間に話すべきなのだが本年度わたしは研修中でその機会がない。代講の伊坂淳一氏には表記（伊坂氏は「書記」ともいう）の分野でも多くの優れた業績があるがこの問題に直接言及なさるか否かわからない。それでこの一編は自分の概論の補講の意味で書くのである。この小さな主題について学生たちは高等学校までには指導されたことがないだろう。大学に学ぶ人間なら自分で組み立てるべき表記原則であるが現実の学生と社会を見るとそれは困難である。わたしのしゃべるわけはそこにある。

一 それぞれの表記原則

世間では、書は人なりと言う。文は人なりとも言う。その書とは、もちろん文字の巧拙・味わいの意であり、文とは、おおむね文

章の内容の意である。この文に、まれには用語や文体も含まれることがある。片仮名の多い文章、やたらと漢字が多い文章などと非難されるのはそのたぐいである。しかし、文体・用語・表記は分かち難く結びついており、本来、これを切り離して文章の価値を云々することはできない、そうわたしは考える。

日本語の研究者は、いずれも文章について一言言を有し、自らの文章においてそれを実践しているはずである。その実際を見るべく、著名な研究者の過去四十年を遡らない論文や著書から、特徴ある文章をごく短く引いて掲げよう。それぞれの著者の表記原則はいかなるものだろうか。（以下、省略箇所は点線で示す。著者の名は稿末に掲げる。）

A 以上は、せっかくの 口語の 発展も 不成功に おわるか、そうでなくとも 解釈が たかい かべに はばまれて
その困難を すくなくとも 容易には のぞきたいと いった例を さきに あげたので あるが、しかしけつして すべ

てが、そうとばかりでは、もとより、ない。

B ここにひとつのたとえをとりましょう。おやどりが抱卵して、ひなを孵化させるためには、すくなくとも、つぎのふたつの条件が必要です。まず、そのたまごは受精卵でなければなりません。また、いったん抱卵をはじめたら、それが孵化するまでのあいだ、しっかりとだきつづけていなければならぬといふことです。

C もちろん、言語による表現がないからと言って、つねに、そういうことがらの受けとりかた、あるいは、事態の把握のしかたがないとは言えないけれども、補助動詞による受給表現に関するかぎり、これが存在しなかった平安中期においては、人々は、事態の受給的な認識をしていなかったと見てよいようにおもわれる。

D ここに、しばらく回想めいた言辭をつらねることをゆるされるならば、まづはじめに私は、京都大學國語學國文學研究室からかうむつた學生時代以來の學恩に對して、感謝の念をあらたにすることを言はなければならぬ。そして、それと同時に、私がこのやうな問題にひきつけられる機縁となつたものが、大學に入つた年の夏休みによんだ……

E 浜成の提起した和歌原理が消滅したことは、浜成が提起した問題意識までが、消失したことでなかつた。浜成の提起した押韻の原理は、繁雜であり、その原理を充足して詠作することは難事であつたかと推測される。したがって、その原理は、採

用されることなく消滅した。けれども、浜成の提起した音韻の旋律は、和歌文學に、新規の展開を現出する、その予言的座標を占有するものであつたといえよう。

F 即ち、それは、言語は文化である、就中に漢字音を撰取する等は、我が國にとつて、文化的には極めたる一大勝事であるはずである。さるものに対して、その間の消息を全く捨象してしまつては、事、恰も木を見て森を見ずの境に類することになる。因りて、須らく、これは本来的なところに戻つて、先ずは大局的に、文化の流れ全体の中において見て、その本質は看破さるべきである、というものである。

G 然乍ら、規範意識の可成明瞭なヘボンが抵抗なく受入れてゐるのは、濁音の場合直音化がより進んでゐたと云ふやうな事實が裏にあつたが為ではあるまいかと思はれるのである。翻つて、若し斯様の、清音より濁音の方が直音化が早く進行したと云ふ傾向が是認せられるとすれば、嚮の……

右の七様の表記、読者の慣れや好みも絡むので、その是非を論ずることはしないが、自分の表記原則を考える手がかりにはなるだろう。快く読まれる文章とはいかなるものか。それを語彙や修辭や文体に限らず、表記の面にも広げて考えるべきだという持論を、特に数の表記を中心に、広く読まれる新聞を主な資料にして展開することが本稿の目的である。

二 一 ある直木賞作品の表記

敗戦後の国語政策を、わたしは基本的に支持する。そのうえで讀れない所は頑強に守るたちはをとる。

現代日本語の表記論では、いわゆる国字問題の焦点になる常用漢字の字体、その音・訓・字数、仮名遣い、送り仮名のたぐいを扱うのが一般であった。片仮名表記が議論的になることがあるが、それは語彙論の問題であることがふつうである。制限漢字の仮名書きを見苦しいという声も、近年は余り聞かれなくなった。「失そう」「破たん」「危ぐ」などを毎日のように目にしていると、無限の声の持ち主でなければまともに対応できない。日本語語彙論の論文に、「彙」が当用漢字ではないので、「語い」と書く人も、「語囲」と書く人もあった。いずれもわたしには受けいれがたい。数少ない批判者に丸谷才一氏があり、かつて「国語教科書批判」(『日本語のために』所収)で、小学校六年生用教科書の「ひとりの人間にとっては小さな一歩だが、人類にとってはきよ大な飛やくである。」を槍玉にあげ、別の文章では、やはり教科書の「東京都お水処理場」を衝いた。近年は高島俊男氏孤軍奮闘の観があり、「少女ら致される」を取りあげて、「少女らイタサレル」とは何事かと叱り(『お言葉ですが』)、「新聞醜惡録」(文春文庫『本が好き、悪口言うのはもっと好き』所収)には、この手の混ぜ書き八十ほどを挙げてその非を衝いている。「主婦の失そう」などは、テレビのワイドショウの恰好の

材料で、字幕には書き替への「失跡」とあるのに、語り手も出席者も「シッソウ」と言う、滑稽な事態が生ずる。

しかし、表記についてはそこで止まっているのが実情で、わたしの知るかぎり、数の表記をめぐる専門家の議論はほとんど耳目に触れなかった。わずかに、かつて三上章氏の文章にそれを見いだし、いま、高島俊男氏の発言が光るだけである。

一昨年の三月下旬、わたしは、謝恩会で学生に向けて話す材料を書店で物色した末に、山口隴氏の『新入社員諸君!』を買って求めた。小冊ながら心に響くことがあったので、氏が文壇に登場する契機になった直木賞受賞作『江分利満氏の優雅な生活』も読んでみる気になり、新潮文庫版を手にした。ところが、本文の一行めから違和感を覚え、立往生を繰り返して、十ページも進まぬうちに、読み続けることを断念したのであった。その立往生した数箇所から三つを掲げる。

① 10円玉は、汗でビッシヨリ濡れて匂っている。1軒の店に着いたとき、そのままの顔付きをくずさず少年は深呼吸して、棚から棚をゆっくり見廻す。

② 彼ははじめ小学校の野球部の選手であったが、1ト月たたたないうちに2軍の首将を命ぜられた。

③ 東西電機は1昨年あたりから電化ブームの波に乗った。傍線を施した箇所、すなわち数の表記にわたしは納得できなかった

のである。①は、少年が十円硬貨を握って貸本屋に駆け行き、目当ての本を借りるばめんである。「10円玉」という表記は、11円玉、

12円玉、13円玉という一円刻みの硬貨の存在を含蓄する。一少年が複数の貸本屋に到着することはありえず、この「いっけん」の「いち」は数を意味しない。「一時」「一説」などと同じく、複数の可能性のある対象の内の「あるもの」の意、英語で“one day”という“one”であり、「一」である。②の「1ト月」は、「1月」としたのでは暦月と紛れることを避ける配慮かと思われるが、不慣れなわたしは「いちとつき」と読みそうであった。この方式で二箇月は「2ヶ月」と書くのだから、三箇月以上はどうするのだろうか。「2軍」は、わたしの言語感覚では、例えば「陸海空の三軍」のうちのいずれか「二つの軍」というように、数を意味する表記である。だが、この用例は第二軍の意味らしい。③の「1昨年」には言うべき言葉がない。これは何回も出現するので、書き誤りではない。

この人が直木賞を受けた年、わたしは大学生だったが、かかる表記が満ちているものを読まなくて幸いだったと思う反面、三十数年前に日本語表記がかくも侵蝕されていたことに気がなかったおのれの迂闊さに呆れた。この文章で受賞したということは、当時の審査員も広範な読者もこの表記を受け入れたということであろう。そのことがわたしには大きな驚きであった。その翌年、名古屋市の高等学校の教壇に立ったわたしは、夏目漱石の作品を「2百10日」と書いた答案について、教室で注意した記憶がある。山口暉流の表記法は生徒たちに滲透し始めていたのだろうか。

その文庫版の秋山駿氏の解説には、次のような記述がある。

われわれのありきたりの生活が、これも実にありきたりの言葉

で描かれている。……この作品が昭和三十七年に受賞していることはなかなか意味深い。昭和三十年代は、……主題として展開しているように、経済の高度成長による急速な大衆社会化状況の変質と過渡期の時代なのである。人の暮しがまるで違ってしまう。現実生活が、われわれの内部の生活の意識と共に、あらゆる局面で動揺し、変化を遂げ、新しくなる。

「ありきたりの言葉」は表記までは含まないと思うが、続く指摘は要点を衝いている。経済の高度成長の大波に洗われて、国土の景観が、町の景色が、家族の光景が変わったように、日本語の文章の景観も変わったように思われるのだ。しかし、わたしは先に例示したような文章を快いとは感じない。

三 新聞の表記の実態

『江分利満氏の優雅な生活』を放りだして旬日を経ぬ四月一日、『毎日新聞』の第一面に、「数字を読みやすく『余録』も大きな活字に」と題する小さな社告が出た。中には、「漢数字が原則だった数字の表記をきょうから洋数字に変えます。」とある。臭いとは思っていたが遂に来たか、というのがわたしの感想であった。というのは、その徴候が現われて久しかったからである。それが社の方針として正式に認められ、紙面はすさまじい状況を呈する。

暖春を話題にした「余録」(99頁) 括弧内の算用数字横書きは西暦年の下二桁と月日)には次のような表記が乱舞する。「宮崎、高

松で平年より1・7度、山口、福岡で1・4度、東京で1・3度、横浜で1・2度それぞれ高かった」「1898年から1996年までの99年間に、日本全国の平均気温は1000年につき約0・9度の割合で上昇」「21世紀末には30〜100℃の海面上昇が予想され」。漢数字を洋数字に変えるとは、横のものを縦にするという意味だったのである。キリスト暦で平均気温の変化を扱えば、数字の多出は避け難いが、漢字・仮名との調和を一切考慮せず太々とした数字を溢れさせる神経をわたしは疑う。

この社告について論じた文章で管見にはいったものは、すぐに反応した高島俊男氏の「一年三〇〇六一〇五日?」(『お言葉です……』所収)だけである。心強い一編だが、結論においてわたしと異なる高島氏は、この題が示すように、「〇」の使用に対する拒否感が主である。「十」「百」「千」をやめるなら、「一〇」「一〇〇」「一〇〇〇」よりは、アラビア数字を並べるほうがまだしも合理的だから、と賛成する。アラビア数字と漢字とは、数を書きあらわす根本が違い、漢数字は数値をあらわすとともに位をも表わすが、アラビア数字は位を位置で表わし、位を表わす字の代りに「0」という字があるのだ。だから毎日新聞の「10」「100」「1000」方式の採用に賛成する、というのである。

右述の現象は新聞紙上に氾濫している。一見些細なことなので、高島氏の指摘を意外に思う人も多いだろう。しばらく手元の切抜きから主に見出しに注目して示し、簡単に言及する。特記しない限り、『毎日新聞』東京本社版で、括弧書きは、年月日、朝夕刊の別、

*印は社外からの寄稿、日付を失念したものと必要に応じて記事の標題やコラム名を明記する。

印の簿1冊(96.3.15夕)

1票の格差 最大2・32倍(96.10.8朝)

「××ビル」2階の1室から出火(97.5.16夕)

1村1品運動(97.11.17朝)

大学講義を1日体験(96.12.15夕)

第一例は右の社告の半月前、一橋大学の学生の文章の見出しである。本文には「第一歩」とあるので、見出しの文責は編集部にあるが、横組みだからというのだろうか。選挙における票の重みがよく議論される、有権者と議員定数の比率が問題なので、2票、3票ということはありえない。よって「1票」の表記は無意味である。ビルの火災で、複数の部屋から同時に出火することはまずないので、「1室」の表記はおかしい。「1村1品運動」は大分県の平松知事が提唱したものが、平松氏はこのように書かれることを肯んずるだろうか。そのくせ、記者の署名記事には「1村1品」「1島1品」と書き(97.9.15朝「外交うらおもて」)、社告との矛盾を厭わないのは不思議だ。

10年一昔(98.1.5朝)

24時間サーブス(97.3.1朝)

4足歩行 2足歩行(97「人類の起源」研究最前線1)

29日、甲府で1周忌(97.3.17朝)

世界4大文明……の三大文明(96.10.29朝 余録)

「十年一昔」は成語である。二十四時間態勢とは「終日態勢」の意味であつて、入れ替え可能な数字を指すのではない。人類の先祖は猿や類人猿であつて、むかでを考へる必要はないのだから、歩行は二足か四足に決まっている。「三大文明」に対して、なぜ「四大文明」なのだろう、第一面の著名なコラムなのに。

1人ぼっちになつた私(97.11.4朝*)

主役のお2人も(97.5.13夕)

成人式つていまだに必要なんでしょうかね? 20歳にもなる大人が……。20歳野郎が……。(97.1.17朝*)

ヒトリボッチは孤独な境遇の意味で、単に人数が「一」だということではない。わたしのワードプロセッサで「ひとりぼっち」と入れると、「独りぼっち」と出る。この筆者より機械が賢い。次の「お2人」は、映画「失楽園」の主役とのインタビュ記事である。接頭語「お」が語るように、これも単なる人数ならざること言うまでもない。このフタリは房事に命を賭ける役を演じた女と男を指すので、「おふたり」とあつてもいいところである。最後の「20歳」は「はたち」と読ませたいのではないか。これはある落語家のコラムだが、編集部の人眼も問われているのだ。出典は示せないが、同様に、「40男」は「不惑」との繋がりや絶ち、「31文字」は短歌の異名「みそひともじ」を喚起せしめない。

「数」はアラビア数字で、「語」は漢字で書くことが毎日新聞の根本原則らしい、と高島氏は推測しているが、実態がそれに程遠いと、右のとおりである。

次に、少し古い『毎日新聞』名古屋本社版、スポーツ欄の記事の見出しから日付を省いて掲げると、材料は尽きない。

- ① 西崎、12奪3振
- ② 細川第1人者
- ③ 佐藤10勝1番乗り
- ④ 九州入りしてからは一日15、16番
- ⑤ 全米1に導いた手腕貸して
- ⑥ アマ野球世界1に挑戦

④の同様に、昨年の組閣人事の記事「25、26年前のこと。今はすっかり忘れて……」(東京本社版 97.9.12朝)がある。佐藤孝行氏の談話なのだが、氏はどう発言したのだろうか。⑤⑥の同類として、「日本シリーズ今夕開幕」の記事(東京本社版 97.10.18夕)に「12球団1」もある。

続けて、二昔前の『朝日新聞』広島版(朝刊)から挙げる。ママは先に退院 5つ子 五つ子のカルテ(76.3.2)

本文はすべて「五つ子」とある。このたぐいは今氾濫しており、例えば選挙報道で、見出しに「4選」、本文に「四選」とする意図が、わたしには理解できない。

3が日の交通事故 死者4・けが152人(75.1.5)。

これで二連勝だが、…3連勝する力はある…(74.10.7)

江川3塁踏ませず(74.11.3)

やはりスポーツ欄に多い。その中で次の見出しはおもしろい。

1日27400000円が戻
 去年の純死1672人
 津防庁が火災確率50年抜 (76.2.9)。

一行めは単位を故意に省いてあるために、読者は零を追って桁を読

まなくてはならず、その結果、ことの重大さに気付かせる魂胆である。これと似て非なるものが最近目にした次の例。

海濱田彌齋 10歳正

年 正 齋 129,382,103円

目標額よりも受付額が多いことは減多にないだろうが、一見、そう錯覚しかねない。これは『成城学園報』一月号、成城学園創立八十周年記念募金の受付状況を報ずる記事である。

ことはテレビも同じである。柔剣道の放送で「初段対2段」などという表記を見ることがある。初段、2段、3段……でいいという人もあるかもしれない。ならば、9段の次は10段か。「十段位戦」からも知られるように、段位制において十段は最高位、十一段はななく、大相撲の「横綱」のたぐいなのに、金比羅さんの石段なみに書かれてはたまらない。

四 現代表記の沿革

第二次世界大戦後、日本人の生活環境は大きく変った。言語生活においてもしかりである。

まず、当用漢字、現代仮名づかいなど、次々に実施された国語政策が挙げられる。これは日本社会の民主化・近代化に大きく貢献したと言える。ほかに、連合国軍の進駐に伴って実施された事象、鉄道や道路のヘボン式ローマ字表記に馴致させられたことがある。学習指導要領では、小学校四年生にローマ字を指導することになって

おり、いわゆる訓令式のローマ字綴を標準とするが、占領期の習慣と英語の普及につれて、日本国内のローマ字表記はヘボン式が主流になったのである。そして、数字を用いる生活の拡大である。すなわち、西暦と称するキリスト暦の普及を初め、電話・ファクス・郵便番号、都市部の住居表示における丁目・番・号など。これらは横書きとも連動して日常生活に深く浸透した。

わたしの前任校は国立大学で、教授会に提出された年度会計の原案を事務官が説明する慣習であった。全学にかかわるばあいには総額で億の単位になることもある。その時の事務官の説明に対して、わたしはいつも期待していることがあった。それは単位の読み誤りで、「123,456,789円」のように数値が大きくなるとそれは必ず実現した。日本語の計数、すなわちシナ語の計数は四桁くぎりなのに、英語の論理で三桁くぎりにコンマを打つことによるのである。会計事務を毎日の仕事にしている事務官にしてこうである。日本語の計数法が頭脳に染み込んでいるのだろう。これは時に悲喜劇を生む。十五年ほど前、わたしは、B6判千六百ページの本の広告で、「定価三、二〇〇円」をいぶかりながら注文した。届いた品物は三万二千円で書肆の釈明はなかった。誤りに気付いていないのだろう。新聞名を書き忘れた切抜き(801225朝)に、折り込み広告の、目玉商品二点の定価を訂正する蒲団屋の社告がある。

一、〇〇〇円均一は一〇、〇〇〇円均一の誤りです。

一、九八〇円は一九、八〇〇円の誤りです。

この二つの事例は、表記法のずれによるとは限らないかも知れない

が、単位併記方式では起こらなかったものである。

わたしの日常生活に、六桁以上の大きな数値を扱うことはほとんどなく、年に一度、所得税の確定申告の際に慣れない計算に悩まされるくらいである。たちの悪いことに、申告用紙には定額を三桁でくぎって印刷してある。わたしは四桁くぎりで書きたいのを我慢して、コンマを一切打たずに記入する。日本語の計数の論理を英語の計数の論理で書かされる。おかしなことだ。その淵源を知るには、文書の横書きについて触れねばならぬ。

意外にも日本国憲法草案は縦書きで議会に提出されている。横書きは、翌年末(46.12.24)の内閣通達「公文用語の手引き」に、「文字は、漢字とひらがなとを交えて用い」「場合によっては、全文を左横書きとする。」として初めて登場する。それが次第に進められ、六年後、国語審議会の建議を経た内閣通知「公用文作成の要領」(52.4.4)で決定的となる。「左横書きの場合は、特別の場合を除き、マシヨム数字を使用する。」として、次の注記がある。

- 1 ……「100億、30万円」のような場合には、億、万を漢字で書くが、千・百は、たとえ「5千」「3百」としないで、「5,000」「300」と書く。

- 3 大きな数は、「5,000」「62,250」のように三けたごとにコンマでくぎる。

つまり、この非合理は政府の推奨によるのである。これは敗戦後に突然始まったものではないが、自らの言語の論理による表記に復帰すべきである。注記1は日本語の計数原理の四桁刻みを認めたこと

を意味するのには、3は三桁刻みも設けたのである。この折衷方式の不思議さは、例えば「23兆5,123億4,567万8,900円」と書いてみると歴然とする。下線部はそれぞれひとまとまりなのにコンマで分断されている。四桁が記憶しやすい桁数の限度であることは心理学でも証明済みだから、各種の番号で生活に参透しているのである。官庁の書類に「1,987年」などと書いたものは見たことがない。兆・億・万で単位を示しながら、そのわずかに一桁下の単位を、コンマで示すのは無駄以前の矛盾である。

具体的で詳しい自治庁の「左横書き文書の作成要領」(59.11.4)から、「数字の書き方」の一部を、丸数字を私に付して引く。

7 数字は次に掲げるような場合を除いてアラビア数字を用いる。

- ① 固有名詞 (例) 四国、九州、二重橋
- ② 概数を示す語 (例) 二・三日、四・五人、数十日
- ③ 数量的な感じの悪い語 (例) 一般、一部分、四分五裂
- ④ 単位として用いる語 (例) 120万、1,200億
- ⑤ 慣習的な語 (例) 一休み、二言目、二日続き、三月(みつき)と読むばあい)

エ 日時、時刻及び時間の書き方は次の例による。

普通の場合 日付 昭和35年1月1日

小学生でも覚えられる簡単な表記原則である。エの項には、まだキリスト暦の日付の書き方は示されていない。毎日新聞の表記は、おむね横のものを縦にしたに過ぎないと言えよう。

わたしの考える数字の表記原則を、右の「要領」と対比させ、下に語例を挙げよう。

- 固有有名等 五行 七夕 十字星 十二支 二十四節気……①③
 特定数値 一周忌 第三者 四段活用 第六感……③⑤
 閉鎖体系 〈段位〉 一人称 二流 三役 四角形……③⑤
 中間体系 昭和六十三年十一月三十日(63年11月30日)
 五丁目二十番十八号(5丁目20番18号)……④
 開放体系 十四万五千人 一四、五〇〇〇人 14,5000人
 五千六百七十八番地 五六七八番地 5678 肆陸
 西暦二千一年 二〇〇一年 2001 年……④

限られた数が特別な意味をもつ特定数値は、「5段活用」などと書けないはずである。閉鎖体系は、「三人称」どまりのほか、「三流」に広げ、「五役」に殖やすことも可能だが、自ずと限度があるだろう。以上は、横書きでも漢数字表記以外に考えられない。中間体系の日付は最大で三十一、住居表示も三十どまりで、縦書きの短所は少ない。元号制で日付を括弧書きするとき、わたしも例のように書くが、あくまでも補助的臨時的な表記の意味である。三桁以上になりうるものを開放体系とした。中間体系は縦横ともにアラビア数字で書いても大差ないが、開放体系にもそれを認めるか否かが問題なのだ。毎日新聞は、閉鎖体系はもとより、時には特定数値にもそれを認め、しかも縦書きにすることを宣言したのである。なお、右の五類に含まれない、ホテルの部屋番号などの「305」「506」がある。これらの「0/」は、「まる」と読まれるように数値を意

味せず、つなぎ符号の役を果たすに過ぎない。

新聞紙面の広告には目をつむろう。しかし、記事の文章・表記には品位と節度が欲しい。「111人(日付失念)」にはそれが缺けるうえに、読みやすくない。

五 表記の論理と美学と経済性

毎日新聞の狙いは洋数字の読み易さをその理由としており、高島氏の言うアラビア数字表記の合理性とは別のところにあつたのだが、もう一つの理由があるのではないか。それは、すでに行われていた、〈交叉表記〉とも言うべきおかしな「経済性」である。実例は珍しくもないが、一例だけ挙げる。

持ち株会社、4000 ~ 5000 人 (98.1.29 朝)

見出しは大きな活字で組むので、縦組みの漢字・仮名一字分の枠に、横から押し潰した細長いアラビア数字を三つ四つと詰め込むことができる。本文では二桁しか入れにくいので、三桁以上には「300人」「5678円」と横のものを縦にして、不均衡を厭わない。

これまで挙げた実例から分かるように、不可解な表記は特に見出しに多い。かつてわたしは、「新聞の用語における見出しと本文の間」という短文でそれを批判したことがある(『言語生活』317号 202)。その不可解な表記にはいくつもの型があるが、特に一段二行の見出しや、ひとつ記事の複数の小見出しにおいて、字数を揃え

るために文法の破格を平然と犯すことがある。字数を揃える美学、紙面を節約する経済性を、日本語の論理に優先させるのである。見出しは記事の顔なのだから、美学と論理を兼ね備えることは当然である。右の例は、「華々森珍草、4000(5000人)」と横組みにすること、それは図れるのである。とまれ、「1万8000円」はわたしには快くないし、「総会屋グループに9百数十万」(97.10.23朝)に至っては論外である。

この傾向はわたしたちの学界にも及んでおり、論文中に歌番号やキリスト暦の年次などを、四桁でも一字分に詰めて書くひとがある。かつてはそれを「95年」のように行からはみだすままに書く人があった。わたしはその先を読まないことにしていたが、近年は印刷所がその要請に応えるらしく、一字の枠に「(388)」などと印刷してある。わたしは老眼鏡の上に拡大鏡を重ねてもよく読めない。

鈴木孝夫氏は、円グラフのように記号と指示対象との間に見られる構造的な対応を「構造的写像性」、その論理を「写像原理」と称している(岩波新書『教養としての言語学』)。言語における写像原理の典型に、漢数字「一、二、三」、ローマ数字「I、II、III」を挙げ、アラビア数字には異説もある、と慎重だが、「1、2、3」は確實だろう。鈴木氏は個々の数字に言及するだけだが、これの運用にも写像原理が関係するのである。例えば〈漢数字単位併記方式〉の「六千五百四十三」は、個々の文字を読まなくては把握できないが、アラビア数字の「5543」も、〈漢数字位取り方式〉の「六五四三三」も、一見して把握できることは疑いない。桁がそのまま単位を

表わず、すなわち写像原理が働いているからである。桁が殖えて「二億九千八百七十六万五千四百三十二」に対する「一、九八七六、五四三二」ともなると、その有効性はさらに明らかである。これは、日本語の計数法でコマを打ったからであって、英語の計数法でコマを打っては逆効果になることは第四節で述べた。現行の新聞の表記、例えば「1兆7000億」、「29万20000円」(97.5.「余録」)は位取り方式と単位併記方式の混用で、この効果が半減している。

国連エイズ計画の記事では(97.12.1朝)、「1997年11月の世界人口は60億」として、世界地図上に、横書きで地域名と数字が記されている。

十 沖 ・ 西 強
2080万人

キ ー ム マ ラ ウ フ、 リ ー グ ー ク ・ バ
1万2000人

後者が多い印象を与えるこの書き方は、前者が最多、後者が最少なのだから皮肉である。これも位取り・単位併記の混用で、第四節で挙げた『成城学園報』の例もそうであった。写像原理の効果に訴えて図を用いたのに、数の表記がそれを打ち消しているのだ。

ここに述べたことは実用文を対象にしたものである。藝術的な文章表現は全く異なり、そこには基準はないと言うべきであろう。仮名遣い・送り仮名・漢字はもちろん、用語も略語から洋語にまで広がることを厭わず、文体を取りまぜて書くこともあるのである。敗

戦後の国字政策に始まった文藝家の苦悩は、ワードプロセッサによる漢字の問題に移り、電子メディア時代の著作権問題に広がった。かかる事態に対処すべく、日本文藝家協会は昨年、「電子メディア時代の知的所有権を考えるシンポジウム」を開き、国語審議会に電子機器による漢字使用に関する要望書も提出した。理事長の江藤淳氏は、慶応義塾大学湘南藤沢キャンパスで、ひとりコンピュータの使用を拒否し続けた人だが、そのシンポジウムの内容を報ずる毎日新聞(8.7.1夕)は江藤氏の談話を、「これは自分の文章だぞ、1字1行書くのが自分の文学だぞという思いで創作してきた者の権利は今後、どうなっていくのだろう。」と書いている。江藤氏は右の「1字1行」をどんな思いで読んだことだろう。

六 未来に向かって

表記の変更は、簡潔であるべき話し言葉にも響いている。〈位取り〉表記の氾濫は、例えば「三三五五」も「三三九度」も使えなくして、言葉の命を確実に奪ってゆくだろうし、「五六」は「ごじゅうろく」なので、気象情報の放送で「最高気温は五度から六度高くなるでしょう」などと言う。本稿を書いている最中に、日本放送協会名古屋FM放送の朝七時のニュースで、「二十八万円から二十九万円の現金がはいったバッグ」というアナウンスを耳にした(8.4.22)。

およそ文章を書いて暮らす人なら、右に述べたことに何ほどかの

疑念をいだいているはずだが、それを表明した文言に接したことがなかった。ようやく高島俊男氏「本が好き、悪口言うのはもっと好き」所収の「年は二八か二九からず」にめぐりあえた。毎日新聞の社告以前の執筆で、氏の原稿が雑誌の編集部によって書きかえられ、その初校刷りが届いたことによる。要点はこうである。

四種類あった書き換えのひとつが、「十日」を「一〇日」とするたぐいの数の表記の変更である。この書き替えの原理は、アラビア数字による数の表記を理想とし、それを縦書きの日本語に入れるために、1〜9に1〜9をあて、〇という漢字もどきをこしらえ、あらゆる数を書くことであった。もはや「十」も「百」も不要で、「百八つの鐘」は「一〇八の鐘」か、「旗本八〇〇〇騎」か。これでは概数表記ができぬ。「二万人」と「二〇〇〇〇人」とは違うのだ。「二三人」と書くことに決まっていたニサンニンをこの方式で「二、三、三人」と書くが、フレーズの切れ目を示す「読点」をそこに使うことは「ばかな」ことだ。

わたしも、ある学会発表の題目「……二三の問題」を、事務局の手で「二、三の問題」と書きかえられた経験がある。この表記にも、じつは文部省のお墨付き『国語の書き表わし方』(8.1.12)があつて、「鳥が三、四羽飛んで行く」「会員は四、五十人です」の例が挙がっている。しかし、高島氏の言うように、「家が四五百軒の村」「鶏頭の十四五本もありぬべし」は明確で誤読の恐れなく、そこに読点を入れるのは「ばかな」ことである。

高島氏は、概数なのに下位の桁を「0」「〇」で書くことの非合理

を衝いて鋭い。同感である。しかし、漢字もどきの「〇」を拒否するゆえに、毎日新聞のアラビア数字縦書きに賛成した高島氏に対して、わたしは、横のものを縦にする「100」式よりも「100〇」式をまだと考える点異なる。漢字もどきの「〇」は、既に漢字の自家の国でもキリスト暦の年次に使われているのだから、特殊な数値に限ってそれを加えた縦書きを、漢字の表記体系の変化として認めるべきではなからうか。ちょうど漢字に仮名を混ぜて書くように。筆鋒鋭い高島氏にも死角があるではないか。その本のあとがき「駄文縁起」を見ると、執筆時期を「一九九四年十二月」とし、『お言葉ですが…』の「あとがき」の日付を「一九九六年…」と書いている。これは、氏の拒否した「八〇〇〇〇騎」式の「位取り」で年を記し、〈単位併記〉で月を記しているのだ。

この指摘を意外だと思ふ人が多いに違いない。キリスト暦の年次は位取りに、月日は単位併記にすることは、現在最もふつうに行われているからである。月日はほとんど二桁以下、年次が四桁であることによる混用である。わたしはそれが嫌いで、年賀状の原稿を「千九百八十五年」と書いて印刷屋に渡したのに、「一九八五年」と刷られた経験がある。岩波文庫版『陶淵明全集 上』の凡例に「詩人の歿後千五百六十二年目、一九八九年十一月しるす」とあるのは、この二つを意識的に使い分けた例であるが、やはり月の表記で崩れている。

漢字の自家の状況をもう少し見よう。主に「中国の国字政策と横組み」(大修館書店編集部 『言語』第五卷九号 1976年)による

と、中国式の表音式文字・注音字母の公布(1918年)に始まる動きが、国語ローマ字(1928年)、ラテン化新文字(1931年)の段階を経て、半国家事業『国語辞典』第一巻が、注音字母と国語ローマ字による発音を示す横組みで刊行された(1937年)。日刊紙『光明日報』は、解放の翌年(1935年)元且号に横組みを採用したが、従来どおり漢数字が用いてあり、アラビア数字の全面採用は六月まで遅れた。原因は方針の未確定らしい。実際の紙面には、「1000〇〇世師」「100多人」「1十多人」と、不統一も残ったという。三年後ごろから急に漢数字が復活し、アラビア数字が最後まで残ったのは年月日の表記だけになった。英語は1988年を19と58に分けて読むが、シナ語では「1988年」を「yī jū wǔ bā nián」と、一字ずつ粒読みするからである。それも八年後には漢数字に戻り、年月日は「一九八八年九月二十三日」と、数量は「一九九四年十月」と書き分けられた。これは、右の『陶淵明全集』の二様の表記である。

現在の中国の新聞は、購読者層の設定によって組み方が異なり、夕刊紙は縦組み、経済紙は横組みが多い。横組みを基本とする一般紙『人民日報』にも、一面に一つくらいは縦組みの記事がある。最近の紙面から、日本の字体に変えて引くとしよう。

まず、「我国利用外资稳步增长」(89.5.20)から。

增幅分别達百十六分之十六点三五

全国累計批准外商独资企業三十一万零五百七十家

合同外資金額五千三百四十七点二億美元

次に、「加快經濟發展 創造就業崗位」(89.5.25)から。

1991年到1997年の7年間、我々国内生産総値年平均増長11.2%、非農産業従業人員年平均増加1400万人、7年累計増加9805万人。国内生産総値毎増長一個百分点、可為非農産業提供125万个新就业岗位。

横組みと縦組みとで数の表記法を完全に交える際際には感心するが、大きな数になると、漢数字の単位併記は、アラビア数字横書きの明解さの敵ではない。写像原理の有利さである。第二例の正統の「零」は、漢字もどきの「〇」を用いる日本との違いを語る。「%」と「百分点」を併用する理由は知らな。

最後に、「唐海耕地面積年連増」(98.6.18)から。
 從一九九一年起……年均連增百分之一點五。……保護區三十一點八萬畝……總面積的百分之八十四點以上。

このように、キリスト暦の年次だけは漢数字位取り表記である。なにも日本だけの現象ではなかったのである。

日本人の言語生活で、数を表記する機会が最も多いのは年月日である。だから、多くの国民が、キリスト暦の年次と住所の番地に限ってこの混合方式を了解するなら、それもよしとすべきだろう。

一方、郵便番号はアラビア数字でなくては読み取れないし、電話番号ともに桁の意味はなく、数字の順序だけが問題なので、「357912468」などの縦書きも厭いはいはしない。

報道における数字の使用は今後も減ることはないだろうから、合理的、美的、効率的な表記を求めねばならない。一見して内容を把握させるには、写像原理に訴える方が有効である。毎日新聞はそれ

をさらに進めて、アラビア数字の縦書きを導入したのだが、わたしはそれを行き過ぎたと言ふのである。縦横自由が日本語表記の長所なのだから、横組みの記事を殖やすべきである。現在、横組みは放送番組・株価・為替・スポーツの記録止まりである。かつて、横組みの最大の障害は日本人の読書慣習と新聞の偏平活字にあったという。今、ワードプロセッサの普及とコンピュータ製版はその障害を取り除いている。各種の経済記事、横文字の多い科学記事、記録の多いスポーツ欄などには、積極的に導入すべきである。

毎日新聞社の方針は、「一九九六年」を「一九九四年」とするのだが、これを認めた高島氏は、かりに自身の文章が「一九九〇年一月湖辺にて」と印刷されたらどうするだろうか。二年後、多くの人が「二〇〇〇年一月」と書いているとき、わたしは涼しい顔でやはり「二千年一月」と書こうと思う。高島氏と言えども、今の表記を続ける以上は「二〇〇〇年一月」とせざるをえまい。それとも「二零零零年一月」と正統法で書くのだろうか。

おわりに

わたしが高等学校の教師をしていた三十数年前、国語の教師には、新聞のコラムを読ませて、その要約、漢字の抜き書きなどを宿題にする人があった。コラムは、新聞記事の中では読める文章と見られていたのである。しかし、現在の実態は第三節で少し触れたとおりである。さらに横文字について見よう。改行箇所は斜線で示

す。

NGO、ODAなどであっても、現在の日本人は何の違和感もいだかないだろう。さらに長い語形の、UNESCO、ASEANもしくり、大文字の表記は縦横にかかわらず略語と見なす習慣が確立しているからである。だから、それが行末でどう切れても、日本語なみに見て意に介しない。かかる常識で「ボイセイ/猿人は八がんじょうな(ROBU/ST)猿人Vで知られる」(97.8.25朝 余録)に接したらどうだろうか。わたしは初め「ROBU/ST」を何かの略語かと思った。が、さにあらず、英語の形容詞「robust」なのである。むろん、robustの二音節語。それを、音節文字と同じ紙幅に音素文字で書き、略語並みに大文字で、縦書きにし、行末で所構わずに切ってしまう。わたしはこの四つの点でこれを拒否する。韓国のIMFによる支援条件をめぐる小話を扱った別のコラム「憂楽帳」では、小文字を混ぜながら、「I am fine/e 大丈夫だ」(97.12.夕)とある。今、かかるコラムを生徒に学ばせる教師はあるまい。わたし自身、前任校の教育学部では、NIE (Newspaper in Education「教育に新聞を」運動)を勧めたが、日本語にとって今の新聞は反面教師でしかない。

毎日新聞木曜日の夕刊には、短詩型文藝を主にあつかう「風のことば」というコラムがある。わたしは割に好きな欄であったが、社告の方針はここにも及んだ。それがいかなる様相を呈するか、およそ予想できるであろう。

短歌にはもちろん1200年に及ぶ歴史がある。……歌合は平

安初期から盛んになり、多いものでは「1500番勝負」もあつた……岩波新書『短歌パラダイス・歌合二十四番勝負』に実録形式で収録されている。(97.5.1)

引用符付きで1500番勝負と書くなど、誤解を期待するような書き方で、およそ調和への配慮が感じられない。

この2年余りに……55の文学館を訪ね歩き……10代の青春期を過ごした弘前市を50年ぶりに訪ねた……年間1億数千万円も負担していると知って、(97.12.4)

文学館の「55」は実数だが、弘前市訪問のくだりは概数、実際は五十一年ぶりなので、「1億数千万」とともにおかしい表記である。わたしには「10代」も受け入れがたい。文藝欄の担当者にしてこうなのである。同じ筆者が、江国滋氏の追悼文に「1句独立の本格俳句」(97.8.28朝)、上田五石氏のそれに「2000字詰め原稿用紙」(97.9.8朝)と書くのも画一的である。

昨年大きな話題を呼んだ、妹尾河童氏の小説「少年H」は、表紙論の点から見ても興味ぶかい。皮肉なことに毎日新聞に載った著者インタビューによると、総ルビに近い表記は、小学校二年生までに学習する漢字二百四十文字以外にルビを振って、子どもの本離れを切り崩そうとしたもの。一つの章を約九千字に統一したのは、約十五分で読み終えられることを意図したもの。各章の最後のページの六行を空白にしたのは、そこで一つの短編の終りの感じを出そうとしたものだという(97.12.2夕)。文章を書くとは、このように考え抜かれた行為でなくてはならない。実際にこの作品を読むと、なるほ

どと感心させられる。総ルビに近いが、じつは見開き二ページで初出の漢字に付けるというきめ細かい配慮なのである。もちろん、数の表記を含めていぶかしい表記は極めて少ない。

繰り返すが、数の表記法など些細なことだ。だから、まともに取りあげるのが少ないのだ。しかし、蟻の巢穴からでも堤防は崩れる。古事記の成立をめぐる論文に「天武紀十〇年」があり、写本の奥書を「洲渚ニ廿三田窪田」と書いた日本史のエッセイもある。固有名詞は変らないから「小沢一郎」にならない、と高島氏は言う（『お言葉ですが…』）が、前任校の教官公募に応ずる履歴書に「京都市東山区3年坂」とあった。大学教員を志す者ですら、固有名詞と住居表示の番号とを区別しないのである。金田一春彦氏のもとには、「金田一春彦様」と書いた私信が届いたという（同氏『日本語の特質』）。右の履歴書と同じころのことだ。2宮尊徳、34郎、石川5右衛門の登場も遠くはない。

以上、主に数の表記を対象に述べてきたが、その非合理と反美学は確実に周辺に広がる恐れがある。日本語ワードプロセッサは便利至極な機械であるが、それが日本人の文章や表記を規制しかねないことにも注意せねばならぬ。特に、書き手の意思とは無関係に機械が文字を選ぶので、自分の表記原則をもたないと、機械に振り回されるのである。例えば、どこそこへ「でかける」を、わたしの機械では先ず「出掛ける」と出すが、わたしは「出かける」と書きたい。一人称の「わたし」を勝手に「私」に換える。この字に「わたし」の訓はないのに。赤ちゃんの手をもみじに「たとえる」と、「例

える」が先んじて「譬える」が後れるのはおかしい。「できる」は再変換で「出来る」を出す、いつまでも出自を引きずることもあるまいし、西日本の人たちがこれを「でくる」と読みなねないことにも思いを致すべきである。文豪「森鷗外」も困る。

現代の表記に関しては、私に〈司馬遼太郎〉〈永六体〉と称する段落構成の問題もあるが、それは、またの機会にしよう。

「いわんと欲することがなんであろうとも、それを言いあらわすには一つの言葉しかない。」（杉捷夫訳による）、モーパッサンは『ピエールとジャン』の初めにこう記している。日本語には正書法がない。だからなおのこと、その言葉をそこに書き記す最適の表記を選ぶことが、書き手の責任になるのである。

去りし二月の転居を機に、わたしは二十年来の毎日新聞購読をやめた。不快に金を払うことはないからである。しかし今、わたしは快く読める日本語の新聞はない。

付記一 第一節に引いた七つの文章の著者の名は左記とおりである。A||かめいたかし B||こまつひでお C||宮地裕

- D||阪倉篤義 E||塚原鉄雄 F||高松政雄 G||岡本勲
 二 『新入社員諸君！』の数の表記が特に異色ということはないが、直木賞作品との違いが何によるかは分からない。
 三 制限枚数を大幅に超えた原稿を縮めたので、遺憾ながら、本稿の表記は持論の完全な実践にはなっていない。

(1998.6.30)

(くどう・りきお 成城大学文藝学部教授)